ポスト・アブドゥルラフマン・ワヒド時代への継続と変化

――第30回ナフダトゥル・ウラマー全国大会（東ジャワ・クディリ）より――

見市　建（みいち　けん）

はじめに
I　政党の設立とヒッタの維持
II　パンチャシラ原則の維持
III　外島支部への譲歩
IV　変革の胎動
V　新指導部の選出
おわりに

はじめに

筆者は，1999年11月21日から26日まで東ジャワのクディリにあるポンドック・プサントレン・リルボヨ(pondok pesantren Lirboyo)(注1)で行われたイスラーム団体ナフダトゥル・ウラマー（Nahdlatul Ulama：以下NU)(注2)の全国大会(Muktamar)に出席した。NUはジャワを中心とした主に農村部に位置するプサントレン（イスラーム寄宿学校）を基盤とし，宗教教育と周辺共同体の福祉向上を主要な活動とするインドネシア最大のイスラーム団体である。大会は5年に1度開催され，活動方針やイスラーム法の解釈に関する議論と決定，指導部の選出などが行われる。

今回は，1984年のシトゥボンド大会以降15年間執行部議長(Ketua Umum Tanfiziah)(注3)を務めたアブドゥルラフマン・ワヒド(Abdurrahman Wahid)が1カ月前にインドネシア共和国大統領に選出されたためこれまでにない注目を集め，数千人の支部代表やウラマーをはじめとするNU会員の他，マスコミ，研究者などあわせて十万人以上が東ジャワの地方都市クディリに押しかけた。筆者はNUの若い活動家たちが期間中借りていた，会場に程近い民家に泊めてもらい，連日，大会のメイン会場の吹き抜けのホール(Aula)やプサントレンのモスクなどで行われていた会議や委員会を見てまわった。また，大会と並行して行われた「若者たちの全国大会(Muktamar Kaum Muda)」や公開シンポジウムなどにも参加し，若い活動家やマスコミ関係者などとも多くの話をした。

本大会はインドネシア最大のイスラーム団体NUによるスハルト体制崩壊以後初めての大会であり，アブドゥルラフマン・ワヒドが大統領に就任したということ以外にも，インドネシア社会全体に関わる注目すべき問題，課題は数多くあった。つまり，スハルト体制下で表出が許されなかった政治的，宗教的，地域的な要求が組織の内外で噴出する状況に対して，既成の社会勢力がどのように対応するかという課題である。小論ではNU全国大会の見聞に基づいてこれらの論点を整理し，NUの今後の展望について若干の考察を試みる。

I　政党の設立とヒッタの維持

NUはアブドゥルラフマン・ワヒドを執行部議長に選出した1984年のシトゥボンド全国大会において，「1926年ヒッタへの回帰」を宣言している。ヒッタ(Khittah)とは，闘争の基本的方針，ほどの意味であり，NUが創設された1926年の精神を取り戻すことを目指して作成された。具体的にはNUが政党活動を止め，本来的な活動と見なされる宗教教育と社会活動を中心とした宗教社会組織(jam'iyah diniyah)に回帰すること，政治家や非ウラマーの執行部に振り回された指導体制から宗教評議会(Syuriah)中心のウラマーの支配に復帰することなどであった。

これらの決定は，当時，最大野党，開発統一党の最大派閥であったNUが，度重なる体制側からの介入を受けていた状況下で，政党活動から撤退することでこれを回避し，むしろ公式な政治システムの外で活動する自由を得るという積極的な意義を持っていた。当時30歳代であったアブドゥルラフマン・ワヒドを中心とした若いNU指導者たちは，プサントレンの閉鎖性と父権的な文化に批判的な立場をとり，イスラーム法解釈においても他宗教に寛容で人権や民主主義の促進を重視する革新的な集団であった。彼らはNU組織の内外に多くのNGOを作って農村開発などの社会活動を行い，また他宗教や世俗の集団とも協力関係を結んで，のちに「市民社会」の建設と呼ばれるような活動方針を採用した(注4)。

しかし，1998年5月のスハルト体制崩壊とその後の民主化の流れのなかで，NU会員も政党を設立した。とくに1999年6月の総選挙で第4党となった民族覚醒党(Partai Kebangkitan Bangsa)は，アブドゥルラフマン・ワヒドの全面的な支持を得た(注5)。他の社会勢力が次々と政党樹立を宣言する中で，会員からはNUが政党を設立することへの反対はほとんど聞かれなかった。アブドゥルラフマン・ワヒド自身は，NU幹部の政党幹部兼任を禁止するシトゥボンド大会決定の建て前から，民族覚醒党の設立宣言者の1人になるに留まった。しかし選挙戦が始まると，ワヒドが選挙運動の前面に出てNU票の動員が図られた。

アブドゥルラフマン・ワヒドは国会議員にはならなかったものの，NU出身の職能代表として国民協議会の一員となり，1999年10月にはインドネシア共和国第4代大統領に選出された。スハルト体制の激しい介入にもめげずにアブドゥルラフマン・ワヒドの議長再選を成功させた前回1994年の第29回NUタシクマラヤ全国大会と比較すると，NUをめぐるインドネシア国内の政治的な環境はまったく変わってしまったのである(注6)。

こうした新しい状況下でのクディリ全国大会では，宗教組織NUとNU系諸政党，また国家（大統領および宗教省などの官僚組織）との関係をいかに再定義するかが問われた。問題は明らかで，例えば1999年6月総選挙前の選挙運動中には，いずれもNU会員である民族覚醒党と開発統一党の支持者間の衝突で死者が出る事件があり，またNU地方支部が特定の政党に肩入れすることも珍しいことではなかった。NUはまた，1950年代に宗教大臣の職を握っていた頃には，補助金やポスト配分をめぐって宗教省との癒着関係が有名であった。

11月21日の大会開会式でインドネシア共和国

大統領としてあいさつをしたアブドゥルラフマン・ワヒドは，NU が国家に対して批判的な態度をとり続けることを要請した。この件に関しては，この演説で大会全体の方向性が定まり議論が終わってしまった感があり，執行部議長の候補者たちも一様に「市民社会」の一部としての NU の役割および国家（大統領）と距離を保持することを繰り返した。ヒッタの維持，すなわち（政治団体ではなく）宗教社会団体としての NU の維持には中央執行部の強い意志と合意があり，大会前から執行部副書記長のアリフィン・ジュナイディ (Arifin Junaidi) などがヒッタの議論はすでに終わっており議題にしない，と言明していたが，まったくそのとおりになった。政党との関係も，民族覚醒党を含めどの政党とも直接の組織的関係を持たないことでヒッタの建て前を維持する，という原則が繰り返し強調されたが，具体的な事例について議論することはなかった。

大学学長で学識が高く清潔な人間として評判のトルハ・ハッサン (Tolchah Hasan) が宗教大臣に据えられたことで，短期的には宗教省との関係が問題になることもないかもしれないが，いずれにしろ，宗教省との関係については知りうる限りまったく話題にもならなかった。宗教的議論では，シトゥボンド大会以降ムストファ・ビスリ (Mustofa Bisri) らを中心に革新的な解釈を展開してきた NU 全国大会であるが，本会議や委員会の場で上のような重要な課題についての議論がほとんど行われなかった。全国大会が，急激なインドネシア社会の変化に対して NU のあり方を話し合う場としてまったく機能していないことは明らかであった。

II　パンチャシラ原則の維持

民主化後のインドネシアでは，これまで抑えつけられてきた政治的欲求が100以上の政党結成という形で現れたわけだが，政党の結成は同時に宗教的な主張の噴出でもあった。最終的に６月総選挙に参加が許された48政党のうち20政党がイスラーム系，２政党がキリスト教系であった。1985年の大衆団体法成立以降「パンチャシラ唯一原則」(Asas Tunggal Pancasila) すなわちパンチャシラ国家五原則に限られていたすべての大衆団体の組織原則(注７)が自由化され，多くのイスラーム系政党は，組織原則をイスラームと規定した。

イスラーム宗教団体においてはなおさら，組織原則をイスラームに戻そうという動きが出てくるのは当然である。NU クディリ大会においても，組織形態についての委員会，およびメイン会場での委員会決議採択はイスラーム原則 (asas Islam) 復帰を望む一部の地方代表の主張で紛糾した。国家からの介入を恐れる必要のない現在，イスラーム団体が組織原則をイスラームに戻そうという主張は至極当然のことであろう。しかし，こうした要求はいずれも議長によって遮られ，半ば強引に議論が打ち切られた。NU 中央執行部はここでも議論無視の頑な態度を見せたのである。

なぜ NU はパンチャシラ原則を維持する必要があったのだろうか。

まず第１に，かつてのパンチャシラ受け入れの経緯がその原因として挙げられる。NU はヒッタ回帰決定をおこなった1984年のシトゥボンド大会でパンチャシラの唯一原則としての受け

入れを表明し，内部規則にこの規定を設けた。1984年の決定においてはパンチャシラと1945年憲法制定におけるNU指導者の役割などの歴史的な正当性を強調し，人間が考えたパンチャシラはイスラームとは次元が違うと，アフマド・シディク(Ahmad Siddiq)(注8)らが受け入れに反対するウラマーたちを説得した［Nakamura 1996, 99-109.］。

パンチャシラ原則の受け入れは，スハルト体制下の非常に厳しい状況における政治的妥協であった。しかし，受け入れに積極的意義を持たせるためにNUは歴史的，宗教的な正当化を行い，他の宗教団体に先駆けてパンチャシラ原則を強制する大衆団体法成立以前に同原則を受け入れた。アブドゥルラフマン・ワヒドはその後，パンチャシラを賛美する立場から，体制や一部のイスラーム勢力を恣意的なパンチャシラ解釈やパンチャシラに反する行動を理由に批判するという，パンチャシラ活用の方法を見出した。したがって，パンチャシラ原則の維持は当時の指導層にとっては正当性に関わる問題であり，状況が変わったからといってそう簡単にパンチャシラ原則を撤廃することはできない。

しかし，そうした正当性が問われるのはアブドゥルラフマン・ワヒドなど一部の指導者のみで，またワヒド自身も正当性維持のためという消極的な理由だけでパンチャシラ原則を固持しているとは思えない。

すなわち第2に重要なことは，パンチャシラ原則がインドネシア・ナショナリズムと他宗教への寛容性を表明するシンボルとして，いまだに機能していることである。先のイスラーム系20政党のうち，8政党はパンチャシラを組織原則とした。民族覚醒党をはじめとするNU系の4政党，およびNUと並ぶイスラーム団体ムハマディヤ(Muhammadiyah)を基盤とする国民信託党(Partai Amanat Nasional)は，いずれもパンチャシラを組織原則とした(注9)。国民信託党の党首アミン・ライス(Amien Rais)はかつてイスラーム強硬派と見られていたが，キリスト教徒を党の幹部に迎えるなど「先進的な」国民政党としてのイメージを売り物にし，コスモポリタン的な都市中間層や大学生にアピールする戦術をとった。

NUは15年間のアブドゥルラフマン・ワヒド体制によって愛国的なムスリムであると自己規定をし，他宗教に寛容という評価を定着させてきた。NUは他のイスラーム諸団体と他宗教・世俗諸団体の間にたち，イスラーム宗教共同体（ウンマ）の一体性よりも，インドネシア国民国家の一体性を重視してきた。イスラーム原則への回帰は，協調的な関係にある非ムスリムに警戒感を抱かせる。中央執行部にとってそうしたイスラーム原則への回帰は論外であった。

Ⅲ　外島支部への譲歩

NUは東ジャワのスラバヤで結成され，現在までその活動の中心地は東ジャワと中ジャワ北部海岸地域となっている。また，NUの指導者になるためには正統なウラマーの血統(darah biru)が必要だとしばしばいわれ，ジャワ人創設ウラマーの子孫に特別な尊敬が払われている。

NUはインドネシア全国に支部をもっているが，概して外島の支持者は少なく，また外島の支部も移住ジャワ人が中心を占めている場合が多い。そうしたジャワ，特に東ジャワ支配に対する外島支部の不満は小さくない。1994年タシ

クマラヤ大会におけるアブ・ハッサン執行部議長候補の健闘は，こうした感情と無縁ではなかった（注6を参照）。

他方，1998年5月以降の政治や宗教の自由化とともに，外島の多くでこれまでの中央集権的支配と不公正な富の地域的分配を修正する要求が高まっている。地方自治拡大や連邦制の議論がさかんになっており，東ティモールの独立はアチェなど他の地域の独立運動を勢いづかせている。

NU大会もこうした潮流から無縁ではなかった。インドネシアの地方分権だけでなく，NU組織内部における外島支部の地位向上への要求が表明された。メイン会場で行われた22日の各州レベルの支部代表演説では，北スマトラ州代表がジャワと外島の経済格差縮小を要請し，ジャカルタ特別区の代表はNU中央執行部の半分は外島から採用するよう訴え喝采を浴びた。

アチェ独立については多くの代表が言及したが，いずれもインドネシアに留まるよう説得すべきであるとの主旨であった。スラウェシ中部代表もスラウェシ独立は拒否すると言明するなど，全体としてはインドネシア・ナショナリズムを鼓舞するような内容が多かった。しかしアチェのウラマーとの交流や交渉といった具体的な提案はなく，この問題へのNUの無力さを露呈した。

各州支部代表演説ではいくつかの代表が特定の執行部議長候補の支持を明らかにしたが，その多くが東ジャワ支部執行部議長ハシム・ムザディ(Hasyim Muzadi)を支持した。もうひとりの有力候補サイード・アキル・シラジ(Said Aqiel Siraj)は西ジャワ出身であったが，外島支部ではハシム・ムザディ支持を明らかにする代表も少なくなく，ジャワと外島で対立が先鋭化することはなかった。むしろ外島票の取り合いのため両陣営の激しいロビー活動が行われた。したがって，今回の選挙においては外島の代表は両候補に大きな交渉力をもち，新指導層には外島出身者も多く含まれた(注10)。

Ⅳ　変革の胎動

こうした本大会に対して「ビジョンがない」と正面から批判をしたのが，若者たちの全国大会であった。参加者の多くはNU傘下の学生団体インドネシア・イスラーム学生運動(Pergerakan Mahasiswa Islam Indonesia)出身で，大学やジャカルタ，ジョグジャカルタ，スラバヤその他の地方都市を中心にしてNGOや学生運動を組織し，人権や労働，環境運動などと協力関係にある20歳前半から30歳代前半までの若者たちである。彼らは政党や官僚組織とは距離を置く「文化的運動」を原則とし，アブドゥルラフマン・ワヒドによる，時に独断的また「曲芸的」な政治的行動には批判的だが，その革新的な思想には深く共鳴している。

若者たちの全国大会は，NUと国家関係，地方分権，農民・漁民・労働者のエンパワーメント，ストリートチルドレンのケア，適正技術とビジネスなどをテーマに事前に5都市でプレ大会が行われ，本大会中は連日討論会が開かれた。パネリストは若手グループの活動家で，外国人研究者もほぼ毎日招待され意見を求められた。扱うテーマは公式の大会と対照的に，非常に具体的かつ実践的な内容であった。

かつて，1984年以降，NU全国大会における宗教的議論は，新しい指導部によって非常に革

新的また今日的な内容に改められ，従来陥りがちだったハラーム（禁止）／ハラール（容認）の二元論に留まらない建設的な議論が目指された。今大会でも，イスラーム法に関する委員会(Bahtsul Masail Diniyyah)では，他宗教の信徒と一緒に祈禱することや女性大統領の是非といった，ここ1年あまりの間に現れてきた具体的なイシューや，イスラームと民主主義や市民社会，ジェンダー，大衆の利益のための国民経済のあり方といった大きな問題群についての議論が行われた。

しかし，先に述べたように，インドネシア社会の激しい変動の中でNUをどういう方向に舵取りし，NU会員同士の政党支持をめぐる衝突やアチェ独立のような現実に起きている組織内外の諸問題に対して，具体的にどういう処方箋をとるのかといった政策的な議論を行うシステムは，全国大会にはないというのが現状である。この点で，初めて行われた若者たちの全国大会は必要な変革の方向を示しているように思われる。

無論，NU本体やウラマーたちも空虚な活動ばかりをしているわけではない。シトゥボンド大会以降農村開発プロジェクトや小規模金融などが多数実施されているほか，NUの下部組織やNU会員によって自律的に運営されているNGOには，政治教育やジェンダー，人権などの分野で日常的におこっている問題をイスラーム法の枠組みを使って解決しようという試みが活発になされている。こうした試みはここ十年余りでウラマーたちの間にゆっくりと，しかし着実に浸透しはじめているように思われる。地方のウラマーのレベルで実践されている紛争解決や人権擁護のための倫理・道徳・法規範としてのイスラーム法適用の成果を，いかにNU組織のなかで制度化していくかが今後の課題になるだろう。

V　新指導部の選出

上のような多くの課題を背負ったアブドゥルラフマン・ワヒド以後のNUは，どのような指導体制がとられるのだろうか。

新指導部の選出は大会の最後に行われた。宗教評議会議長(Rais Am)には中部ジャワのサハル・マフズ(Sahal Mahfudz)が予想通りの圧倒的支持を受けて選ばれた。執行部議長候補には，ハシム・ムザディ，サイード・アキル・シラジの二大候補の他，ムストファ・ビスリ，サラフディン・ワヒド(Salahuddin Wahid)，アフマド・バグジャ(Ahmad Bagja)が推薦された。

実務家として定評がある東ジャワ州支部執行部議長ハシム・ムザディは最有力候補と見られており，22日の地方支部代表演説においてもすでにジャワ内外から広い支持を集めていた。他方，本部宗教評議会副書記長(Wakil Katib)のサイード・アキル・シラジは若手ウラマーの中では飛び抜けた学識の高さと革新的な思想を持っており，若い世代からの支持が大きかったが，シーア派や他宗教への寛容さの行き過ぎが批判されていた。ムストファ・ビスリは世代的にも地位的にもアブドゥルラフマン・ワヒドと並ぶ大ウラマーである。彼は，すでに金銭授受が噂されネガティブ・キャンペーンがさかんに行われていた二大候補の対立が先鋭化して選挙が行き詰まった場合の代替候補と考えられていた。しかし，結局そのような事態にはならず，ムストファ・ビスリは候補者推薦投票のあと立候補

を辞退した。

ひとり異色だったのは，ウマット覚醒党の副議長を務めるサラフディン・ワヒドである。サラフディン・ワヒドはアブドゥルラフマン・ワヒドの弟だが，アブドゥルラフマン・ワヒドとつねに対立する立場にあり，保守的な反主流派の支持を受けた。サラフディン・ワヒドは候補者推薦投票で第3位の56票を獲得して存在感を示し，本投票には辞退して新執行部の副議長(Ketua)筆頭の座に収まった(注11)。

サラフディン・ワヒド以外の候補者はすべてアブドゥルラフマン・ワヒドに近い人物であり，基本方針の継承には問題がなかった。ハシム・ムザディ，サイード・アキル・シラジの2人による執行部議長選挙は下馬評どおり前者が215対105で勝利した。

議長によって任命される副議長以下のポストもアブドゥルラフマン・ワヒドに近い人物が大半を占め，執行部議長選に敗れたサイード・アキル・シラジも宗教評議会副議長(Rais)のひとりに選ばれた。サイード・アキル・シラジの前職である宗教評議会副書記長筆頭には，革新的で若手NGO活動家のリーダー格であるマスダール・マスウディ(MasdarMas'udi)が選ばれ，初めて中央指導部に入った。また，先に触れたように，ジャワ以外の地域にも配慮した人事になった。

おわりに

クディリで行われた第30回NU全国大会における議事進行と新指導部の人事から明らかになったのは，NUがあくまで1984年のヒッタ回帰以降のアブドゥルラフマン・ワヒド路線の継承を基本戦略とすることである。若い世代の支持を受けた革新派からの急進的な変革，あるいは保守派によるイスラーム原則への回帰，外島支部からの要求が高まる可能性もあるが，当面大きな路線変更はないと予想される。新しい執行部議長ハシム・ムザディは組織運営に長けているといわれるが，アブドゥルラフマン・ワヒドのようなカリスマ性はない。おそらく正当性付与装置としての宗教評議会の地位が高まり，「NGOキアイ(Kiai LSM)」(注12)とも呼ばれる革新的かつ行動的な議長のサハル・マフズの指導力が重要になってくるだろう。

アブドゥルラフマン・ワヒド路線の継承とはつまり，第1に国家や政党と距離を保ち「市民社会」を形成すること，第2にインドネシア国民国家の枠組みをイスラーム連帯よりも重視する立場から他宗教・世俗の勢力との協力関係を維持すること，第3に社会の下層に位置するNU大衆の経済的社会的地位の向上に努めることである。組織内のさまざまな勢力の要求に応えつつ，大統領，宗教大臣のポストを押さえ，政党組織を持ったNUが官僚組織や政党との境界線をいかに維持できるかが大きな課題となるだろう。

アブドゥルラフマン・ワヒド体制の15年間でヒッタの革新的な解釈が定着した。次代を担う若い活動家たちはワヒドやNU指導部に批判的だが，むしろアブドゥルラフマン・ワヒド本人以上に彼の理念に忠実である。したがって，この路線継続に関してはあまり問題がなかろうが，その内実と成果が問われてくる。

NU内外の社会活動やNGO活動は活発であるが，NU大衆の経済的・社会的地位は大きく改善しているとはいえない。今後5年間のサハ

ル＝ムザディ体制には，こうした理念をアブドゥルラフマン・ワヒドのような「曲芸的」言動や個人のカリスマ性に頼らずに実行する組織固め，制度的な整備が求められている。そのためには，1984年以降の宗教的議論の革新にみられたような大胆な改革の姿勢が必要であり，一部のNU下部組織や外部のNGOによって行われている成果を積極的にNU全国大会やNU支部の日常的活動のなかに取り入れていく必要があろう。

（注1） ポンドック・プサントレンは寄宿制のイスラーム学校で，インドネシアのほか同じような形態の学校が東南アジア各地のイスラーム地域に存在する。プサントレンについて，特にプサントレン・リルボヨの歴史，教育内容などについては，西野（1990）に詳しい。

（注2） 「ウラマー」は，イスラーム法学者。NUの場合はほとんどがプサントレンの指導者・経営者でもある。多くのウラマーに対して，ジャワ語の尊称でカリスマ性を想起させるキアイ(kiai)という呼称が使われる。

NUは1926年に東ジャワのスラバヤで設立された。ナフダトゥル・ウラマーとは「ウラマーの覚醒」を意味する。宗教的にはスンナ派の伝統主義ムスリムでシャーフィイー派が多い。ジャワを中心に3000万以上の会員がいると言われている。

（注3） NUは，宗教的権威を持ち基本的方針を決定するウラマーの宗教評議会(Syuriah)と，実務を担当する執行部(Tanfidziah)の二重構造が中央（ジャカルタ）から地方支部まで貫かれている。組織的には宗教評議会が上位にあるが，実際には執行部が実権を握ることが多く，ウラマーの権威の失墜が問題にされる。

（注4） こうした戦略について「ヒッタ回帰」以前にアブドゥルラフマン・ワヒド自身が書いた文章が日本語に翻訳されている（アブドゥルラフマン・ワヒド1987，250-287）。

（注5） 民族覚醒党の他にナフダトゥル・ウマット党(Partai Nahdlatul Umat)，ウマット覚醒党(Partai Kebangkitan Umat)，インドネシア国民統一連帯党(Partai Solidaritas Uni Nasional Indonesia：SUNI)がNU非主流派によって設立された。「ウマット」はイスラーム宗教共同体を表すアラビア語のウンマ(umma)と同義。「ナフダトゥル・ウマット党」，「ウマット覚醒党」もNU主流派の政党名の候補として挙がっていたが，最終的にもっとも「ナショナリスト的」な「民族覚醒党」が採用された。NU主流派はアラビア語のナフダトゥルではなく，インドネシア語のケバンキタン（いずれも覚醒を意味する）を，ウンマではなく（インドネシア）民族を選択したのである。

またインドネシア国民統一連帯党の略称SUNIはスンニー（スンナ）派を意味する。既成の開発統一党の党首ハムザ・ハズ(Hamzah Haz)もNU出身で，多くのNU会員が投票したとされる。後に述べるように，これらの政党はNUとは別組織として設立され，ヒッタの非政治原則はあくまで維持するとされた。

（注6） 1994年のタシクマラヤ大会における執行部議長選挙では，体制側の後押しを受けたジャンビ島出身のアブ・ハッサン(Abu Hasan)が外島や反ワヒド派閥の票を取り込んで，アブドゥルラフマン・ワヒドに32票差と迫った。アブドゥルラフマン・ワヒドの再選は，介入に負けなかったNUの社会勢力としての自律性と評価された(Greg Fealy 1996, 257-277)。

（注7） 1945年憲法前文に記載されているパンチャシラ国家五原則とは以下のとおりである。(1)唯一神への信仰，(2)公平で文化的な人道主義，(3)インドネシアの統一，(4)協議と代議制において英知によって導かれる民主主義，(5)インドネシア全人民に対する社会正義。

（注8） アフマド・シディクはヒッタの定式化を行ったウラマーで，シトゥボンド大会でアブドゥルラフマン・ワヒドとのコンビで宗教評議会議長(Rais Am)に選ばれた。

（注9） SUNI党を除くNU系政党は，パンチャシラだけではなくイスラーム的な色彩を加え，民族覚醒党は「スンナ派原則に基づくパンチャシラ(Pancasila dengan prinsip Sunnah wljamaah)」を組織原則とした。

（注10） *Jawa Pos, Suara Merdeka* (November 27, 1999)によれば，執行部副議長に新たに南スラウェシのアンディ・ディアマロ(Andi Diamaro)が，宗教評議会副議長にはそれぞれ中スラウェシ，西ヌサトゥンガラから1人ずつ選ばれた。さらにウラマーの助言委員会(Musytasyat)は9人中4人が外島出身者となった。

（注11） *Jawa Pos* (November 27, 1999)によれば，

候補者推薦投票の結果は以下のようであった。ハシム・ムザディ149票，サイード・アキル・シラジ71票，サラフディン・ワヒド56票，アフマド・バグジャ22票，ムストファ・ビスリ21票，アブ・ハッサンなど3名に各1票，無効2票。

（注12） キアイはジャワ語の尊称（注2を参照）。LSM（Lembaga Swadaya Masyarakat：社会自立組織）はNGOとほぼ同義で使われている。

文献リスト

アブドゥルラフマン・ワヒド 1987.「理想への橋頭堡」イマム・ウォルヨニコンス・クレーデン編著，山本春樹訳『これからのインドネシア—発展を模索するパンチャシラ社会』サイマル出版会.

西野節男 1990.『インドネシアのイスラム教育』勁草書房.

Fealy Greg 1996. "The 1994 Congress and Aftermath: Abdurrahman Wahid, Suksesi and the Battle for Control of NU." in *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia,* eds. Greg Fealy and Greg Barton. Clayton: Monash Asia Institute

Nakamura, Mitsuo 1996. "NU's leadership Crisis and Seach for Identity in the Early 1980s: From the 1979 Semarang Congress to the 1984 Situbondo Congress." in *Nahdlatul Ulama, Traditional Islam and Modernity in Indonesia,* ed. Greg Fealy and Greg Barton. Clayton: Monash Asia Institute.

（神戸大学大学院国際協力研究科博士課程後期，日本学術振興会特別研究員）